

國學院大學學術情報リポジトリ

近松浄瑠璃におけるシク活用形容詞の終止形について：拍数からの考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 近松浄瑠璃, シク活用形容詞終止形, 語尾「シ」「シイ」「シシ」, 拍数, 七五調 キーワード (En): 作成者: 杉本, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001702

近松浄瑠璃におけるシク活用形容詞の終止形について — 拍数からの考察 —

杉本 裕子

キーワード…近松浄瑠璃、シク活用形容詞終止形、

語尾「シ」「シイ」「シシ」、拍数、七五調

一 はじめに

近世前期の口語資料として有用とされている近松浄瑠璃だが、語り物という性格を明らかにするための分析も、言語資料としての価値を確認する上で必要であろう。本稿では近松浄瑠璃の詞章からシク活用形容詞の終止形を調査し、出現形態の状況からその言語の一端の分析を試みる。

シク活用形容詞では、語尾が「シ」で終わる文語終止形と「シイ」で終わる口語終止形のほかに、語尾が「シシ」の形をとるものがある。それらの形式の出現について、特に

拍数に注目して考察したいと考える。

浄瑠璃では所謂七五調が多く出現する。しかし近松は七五調に合わせることは良しとはしていなかったことも「難波土産」にある通りである。^(註1)シク活用形容詞は語尾によって拍数が変わることに着目し、定型的な語りの表現と写実的な表現とが融合している浄瑠璃において、韻律の意識がどのように表れているか観察したい。

二 調査対象について

資料は『近松全集』（岩波書店）一卷から一二巻の世話物二四編、時代物七三編を用い、シク活用形容詞の終止形を調査する。調査対象とする用例は文語終止形、口語終止

形、そして語尾が「シシ」の形となるものの三種で、終止形の形式ごとの形容詞語彙の拍数と特徴を観察する。終止形といってもそこで文が終止するとは限らず、文頭に置かれる場合や、中止法、あるいは挿入句的に文中にくるものもあり、文の切れ目が分明でない場合も多いが、位置に関わらず終止形で文が一旦切れる例を採取した。

用例は地の文、会話文、道行に分けたが截然と分けられない部分がありその都度判断した。例えば不特定多数の人間の発話として、形容詞が単独であるいは列挙されて現れる場合などは地の文としている。心内文、独話文は会話文に含める。道行は会話と地の文の区別はしていない。道行以外にも音曲的色彩の強い景事部分はあるが、道行の他は地の文とした。加賀掾本と義太夫本で内容がほぼ同一で詞章も一致する部分が多い作品は、用例が重複することがあるがそのまま用例数に数えた。^(註)掛詞、歌謡、和歌、故事の引用等は対象外とした。ほかに疑問、反語の意となるものや「はづかしとは存ぜねども」のように会話文中で現れる例は除外した。終助詞を伴う例も除外している。このほか文末に現れるものでは「あさましや」のように「語幹+や」

の形となっているものが非常に多く、ほかに連体形や已然形で終止するものもあるが、今回は終止形のみを対象とする。以降、文語終止形の例を「シ」型、口語終止形の例を「シイ」型、シシ語尾をとる終止形の例を「シシ」型と表記する。

三 先行研究

浄瑠璃の詞章について、坂口(一九八二)では〈節づけを前提とした韻律的な文章〉という観点から近松と紀海音の「マスル」と「マス」を調査し、口語性の高い資料とされる浄瑠璃で古形の「マスル」の比率が他の資料より高い理由を、七五を中心とした韻律によるものとしている。同じく近松の世話物に見られる文法事象を文体の面から分析した研究に矢島(二〇〇四)があり、条件形式について調査した結果、後期ほど新興の口語的表現が増え七五調への拘泥は低くなっているが、音数律から七五調と形式の選択には関わりがあることが示されている。また矢島(一九九二)では浄瑠璃の形容詞「ナシ」「ナイ」の文について「聞き手に対する伝達態度」による相違があると分析し

た上で、古形の終止形は「切れて続くがごとき文体にて機能」しており、古い形と新しい形の表現特性に違いがあると述べている。小松（一九七五）では、近松世話浄瑠璃の武士の言葉はある程度実態を反映したものであり、「し」で終わる形は実際の口頭語でも使用されていたことが指摘されている。近松世話物の言語は口頭語をある程度反映しながら、語り物としての文体の中にあるもので、古形の残存という点からも考察が必要である。

シク活用形容詞に見られるシシ語尾についても確認しておく。シシ語尾の成立について北原（一九七九）では口語終止形「―しい」から文語形を復元しようとして「―し」としたもので、「―い」は口語形、「―し」は文語形という意識に基いた再構」とする。湯澤（一九五五）では近世上方の文語調の文には珍しくなく、ク活用形容詞の終止形とともに事柄を列挙する場合や理由・原因になることを示す場合があり、実際の対話にも使われたであろうと述べている。鈴木（一九六三）ではシシ語尾は文語に用いられ「古めかしさ」を表現するもので強調的表現を担っているという。鈴木（一九九九）においてはその中止法や理由表現に

ついて述べられ、京（二〇一五）では中世以降の不十分終止について、古形の残存という面からシク活用形容詞の場合シシ語尾をとるとしており、中止法や理由表現での出現が注目される。辛島（二〇〇〇）の中世仮名文書の研究では、シシ語尾はもともと文筆に詳しくない人々が口頭語で使用した「文語的な表現」で、「俗文語」的な性質との指摘もあり、佐藤（一九六二）、鈴木（一九六三）においても「人工的な文語」とあるように、シシ語尾は「文語的な表現であると同時に正統的でない表現という見方もあったであろう。文語的表現としても、語尾が「シ」の場合と「シシ」の場合では拍数が変わることから、七五調を基調とした浄瑠璃の文体にシシ語尾がどうかかわるか注目したい。

四 全体の用例数

まず用例数を確認しておく。採取した用例は「シ」型五三三例、「シイ」型四五三例、「シシ」型三五一例、合計一三三七例である。^(注3)内訳を〈表1〉に示す。世話物と時代物の言語量にはかなり差がある。作品数だけで時代物は世話物の三倍あり、さらに時代物は世話物の倍程度の長さが

〈表1〉各形式の用例数

	シ (533)		シイ (453)		シシ (351)		全体 (1337)	
	時代	世話	時代	世話	時代	世話	時代	世話
会話	341	32	254	197	239	13	834	242
地	112	16	1	0	88	10	201	26
道行	18	14	0	1	1	0	19	15
計	471	62	255	198	328	23	1054	283

〈表2〉形容詞の拍数別用例数

	「シ」型		「シイ」型		「シシ」型		全体	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
2拍語	1	1	2	8	2	5	3	14
3拍語	18	93	13	97	5	46	19	236
4拍語	25	171	30	279	36	292	47	742
5拍語	60	238	30	58	5	5	73	301
6拍語	8	27	6	9	3	3	16	39
7拍語	3	3	2	2	0	0	5	5
合計	115	533	83	453	51	351	163	1337

あるとすると、単純に見て時代物は世話物のおよそ六倍の言語量となる。そこから見ると「シ」型と「シシ」型はどちらも世話物よりも時代物に多く現れているが「シシ」型の方が時代物に多く、会話文と地の文の比率を見ても「シ

シ」型の方がより文語的な性格を持つと言えそうである。但し道行は「シ」型に集中している。それに比べ口語終止形である「シイ」型は世話物の比率が高くほぼすべて会話文中に現れており、より口語性の強い場面でも多く使用されている。浄瑠璃の詞章にシク活用形容詞の終止形が現れる場合どのような形式が選ばれているか、次からは主に拍数に注目して考察する。

五 各形式のシク活用形容詞語彙の特徴と拍数

五・一 概観

浄瑠璃の詞章は七五調を基調としており、語りに合わせやすい拍数に整えられることが考えられる。「難波土産」もそのことを踏まえての近松の言である。近松浄瑠璃においては七五調から離れた詞章も多く、また七五調を基調とした部分であっても、七五調に綺麗におさまることは少なく他の音数も現れる。先にあげた坂口（一九八二）、矢島（二〇〇四）では、近松に比べ紀海音の浄瑠璃ではより七五調が意識されていたことが指摘されている。

〈表2〉は拍数ごとの用例数である。各形式で最も多い

〈表3〉 拍数ごとのシク活用形容詞語彙用例数

	「シ」型	「シイ」型	「シシ」型
2拍	惜し	欲し (6) 惜し (2)	あし (4) 惜し
3拍	かなし (18) うれし (15) いとし (11) 恋し (11) ゆかし (8) くるし (7/2) やさし (5) ひさし (3) さもし (2) すずし (2) はげし (2) ゆゆし (2) をかし (2) <u>あやし</u> <u>まぎび</u> <u>しくやし</u> <u>せはし</u> <u>ひと</u>	うれし (36/9) かなし (20) いとし (17/2) くやし (4) さもし (4/1) やさし (4) を かし (4) 恋し (2) ひさし (2) くるし <u>はげし</u> <u>せはし</u> <u>ゆかし</u>	うれし (33/11) をかし (4) やさし (4) いとし (3) さもし (2)
4拍	はづかし (24/1) 口惜し (22/2) たのもし (18/8) おそろし (15/1) ねたまし (9) あさまし (8/1) いぶかし (8/2) みぐるし (8/1) むつかし (8) めづらし (8/2) なつかし (7) いやらし (6) いた はし (5) かしまし (5/1) いまはし (3/1) さ わがし (3/3) しほらし (3) うらめし (2) つつ まし (2) やかまし (2) いそがし いとほし ござ かし <u>すさまじ</u> にぎはし	口惜し (56) やかまし (47) うらめし (28) はづかし (26) めづらし (26) かしまし (19/1) おそろし (13) みぐるし (8) むつかし (8) あさまし (6) ねたまし (6) いやらし (5/1) たのもし (4) しほらし (4) <u>もどかし</u> (3) さわがし (2) いそがし (2) あたらし (2) <u>むごらし</u> (2) いたはし うつ くし <u>うっとし</u> うとまし おと なし <u>おとまし</u> <u>おろかし</u> ござ かし <u>邪魔らし</u> なつかし <u>ばか</u> <u>らし</u> <u>わらべし</u>	たのもし (44/8) 口惜し (37/1) いたはし (25/1) お そろし (20) はづかし (20) すさまじ (18) あさまし (16/1) めづらし (14) やかまし (14) みぐるし (13/1) むつかし (12) ねたまし (6) なつかし (6) いぶかし (5) いやらし (4) おとなし (4/1) しほらし (4) さわがし (3) <u>なげかし</u> (3/2) <u>いさまし</u> (2) いとほし (2) うらめし (2) かしまし (2) <u>たくまし</u> (2) <u>むつまじ</u> (2) <u>めざまし</u> (2) <u>あいらし</u> <u>いか</u> <u>めし</u> <u>いそがし</u> <u>うつつし</u> <u>うと</u> <u>まし</u> <u>かうばし</u> <u>恋らし</u> <u>にぎ</u> <u>はし</u> <u>際惜し</u> <u>まどはし</u>
5拍	気づかはし (42) けがらはし (24/2) いまいまし (19) <u>ものものし</u> (19) ことをかし (14/1) おびただし (12/1) うらやまし (9) よろこばし (8) なまめかし (7) <u>ぎよ</u> <u>うぎょうし</u> (6) ことごとし (5) <u>かしまし</u> (4) <u>いた</u> <u>いたし</u> (3) <u>いとらし</u> (3) <u>おくゆかし</u> (3) <u>かはいら</u> <u>し</u> (3) <u>かろがろし</u> (3) <u>はれがまし</u> (3) <u>ものさびし</u> (3) <u>あさあさし</u> (2) <u>あつくろし</u> (2) <u>いそがはし</u> (2) <u>かた</u> <u>くろし</u> (2) <u>にがにがし</u> (2) <u>人がまし</u> (2) <u>をがまし</u> (2) 愛想らし あはうらし あわたたし <u>今めかし</u> うたがはし 気むつかし <u>口がまし</u> けたたまし <u>げげげし</u> <u>袖々し</u> <u>こ</u> <u>とくどし</u> <u>さうごうし</u> <u>子細らし</u> <u>しらじらし</u> <u>せはせはし</u> <u>たどたどし</u> <u>名残惜し</u> <u>情らし</u> <u>なれなれし</u> <u>にぎにぎし</u> <u>に</u> <u>ぎははし</u> <u>のんごらし</u> <u>はなばなし</u> <u>はらだたし</u> <u>ひがひが</u> <u>し</u> <u>ふるめかし</u> <u>ほでくろし</u> <u>まむひさし</u> <u>みすほらし</u> <u>もの</u> <u>やさし</u> <u>ものゆかし</u> <u>ものむかし</u> <u>ぬらし</u> <u>よそがまし</u>	いまいまし (11) うらやまし (8) あはうらし (5) <u>こむつ</u> <u>かし</u> (3) <u>かたくろし</u> (2) <u>け</u> <u>たたまし</u> (2) <u>名残惜し</u> (2) <u>笨羅らし</u> (2) <u>こやかまし</u> (2) <u>まざまざし</u> (2) <u>あつくろし</u> <u>あわたたし</u> <u>あらくまし</u> <u>うそ</u> <u>さびし</u> <u>うたがはし</u> <u>おびた</u> <u>だし</u> <u>ことをかし</u> <u>小無益し</u> <u>子細</u> <u>らし</u> <u>さうごうし</u> <u>しらじらし</u> <u>自由らし</u> <u>にがにがし</u> <u>につこ</u> <u>らし</u> <u>人がまし</u> <u>まがまがし</u> <u>む</u> <u>ごたらし</u> <u>胸くるし</u> <u>をこがま</u> <u>し</u>	うたがはし 気づかはし こと をかし 子細らし よろこ ばし
6拍	ことむつかし (9) ことやかまし (8) おそれがま し (3) <u>さらおそろし</u> (3) <u>心ゆかし</u> <u>胸さわがし</u> <u>ものぐるほし</u> <u>ものさわがし</u>	あたやかまし (2) <u>うそはづか</u> <u>し</u> (2) <u>ことあたらし</u> (2) <u>毒人</u> <u>らし</u> <u>ついでがまし</u> <u>もっともらし</u>	おもはづかし ことやかま し 若輩らし
7拍	あたいまいまし 悪口がまし あなづりがまし	隔心がまし なまいまいまし	

部分の数字は太字、次に多い部分の数字は斜体で示した。全体の延べ語数は四拍語が多いが、異なり語数では五拍語が最も多い。使用頻度の高い基本的な語彙は三拍語、四拍語に多く、異なり語数に對して延べ語数が多い。形式別では「シイ」型、「シシ」型の延べ語数は四拍語が最も多く次が三拍語であることが共通しているが、異なり語数では「シイ」型は四拍語と五拍語が拮抗しており「シシ」型は四拍語に集中している。それに対して「シ」型は異なり語数、延べ語数ともに五拍語が最も多いのは特徴的である。全体の五拍語の異なり語数が多いのも、「シ」型に現れる五拍語の多さによるものである。

（表3）には拍数ごとのシク活用形容詞語彙を整理した。実際の出現形式にかかわらず文語終止形で掲出している。拍数もそれによる。下線を付したのはその形式でのみ見られる語である。同じ語が「うれしうれし」のように繰り返し返して現れている場合も用例数は一とし、／の後に繰り返しで用いられた回数を示した。「うれし」「おそろし」「口惜し」「はづかし」のような感情形容詞はどの形式にも多く見られるが、同じ感情形容詞でも「かなし」は「シ」型「シイ」型には多いが「シシ」型には見られない。また例えば「たのもし」は「シシ」型に、「やかまし」は「シイ」型に多く、「氣づかはし」は一例を除いてすべて「シ」型であるなど、その出現の形式は均等ではない。

異なり語数と延べ語数から見ると「シ」型が異なり語数、延べ語数ともに最も多いが、他の形式に比べ延べ語数に対して異なり語数の比が高く、語彙に多様性がある。逆に「シシ」型は延べ語数に対しての異なり語数の比が低く、同じ語が何度も出現することが多いということになる。全用例で出現回数が一回のみの語が六三語あるが、そのうち「シ」型が三五語、「シイ」型が二〇語、「シシ」型が八語である

ことからそれがいえる。「シ」型の三五語のうち二六語が五拍語で四拍語がなく、「シシ」型の八語のうち六語が四拍語であることも特徴的である。

また出現回数にかかわらず一形式のみに現れるシク活用形容詞語彙は「シ」型が五九語（一五一例）、「シイ」型が三一語（四八例）、「シシ」型が一四語（二三例）である。特に「シ」型は一割強が他の形式に見られない語彙でその五九語のうち四一語が五拍語、「シシ」型では一四語のうち一一語が四拍語であることは注目され、それぞれの形式と語彙の拍数には相関があることは明らかである。

拍数に注目して考察するにあたって、拍数をどう数えるか整理しておく。以下の考察では浄瑠璃の語りが「七五調を基調としたもの」であることを前提としており、詞章内での五拍七拍に注目することになるが、七五調でない部分も多く実際には節付や大夫の語りによるところも大きい。表記の文字数が実際の語りではそのまま拍数とはならない場合もあるが、ここではあくまで「七五調を基調としたもの」と想定した文体に添うかどうか、その指標として詞章に出現する形での拍数を問題とし、五拍七拍に注目する

ものである。さらに七五調を基調としている場合、その詞章の語句には「まとまり」が意識されていると考えられるので、形容詞語彙のみの拍数だけでなく、文中での「まとまり」としての拍数もあわせて観察することとしたい。

シク活用形容詞終止形を含む語句をその「まとまりの拍数」ごとに数えたのが〈表4〉である。例えば二拍の感動詞を伴う「ア、うれしい」では、形容詞の拍数としては四拍だが、まとまりとしては六拍とする。「うれしいうれしい」は、繰り返しでまとまりであると考えて八拍とする。「ア、うれしいうれしい」は感動詞と繰り返しがあるがこの場合は十拍と数えた。例えば

①廿年たらず連れ添ふて何を男の為もせず。身の難儀をかけること恨みにあらふ憎からふ。それが悲しい面目ない。

「長町女腹切」半七叔母↓夫甚五郎 八卷五〇頁
右の例では七五調を基調としており「廿年たらず／連れ添ふて／何を男の／為もせず。／身の難儀を／かけること／恨みにあらふ／憎からふ。／それが悲しい／面目ない。」と分けることができ「それが悲しい」の七拍がまとまりとなり、

②定てこちらの嘉平次もまああの通り。嘉平次の悪性ではお山を相駕籠て。外樋の下にか、んでみようもしままい。

見るめも悲しい浅ましい。是といふも親の恩を忘る、ゆへ。 「生玉心中」嘉平次姉↓弟幾松 九卷五八〇頁
という例では、全体としては七五調には遠くまとまりが掴みにくいが見るめも悲しい（八拍）／浅ましい（五拍）の部分はまとまりとして数える。さらに、会話文末尾の形容詞を地の文の「と」で受ける例がある。

③わたしを天人か楊貴妃か。誉られたふない聞たふない。日比の忠節だて皆偽り相手に成も忌々しと。駆け入裾をしつかと取て

「関八州繫馬」詠歌の姫↓箕田二郎 一二卷六九〇頁
このような場合、会話文の末尾で一旦切れるとも「と」までひと続きになるともとれ、実際にどのように語られたかは、少なくとも詞章だけでは判断できない。しかしこのように会話文末尾の形容詞を受ける「と」に注目することによつても韻律の意識について窺い知ることができるのではないかと考える。そのため会話文を受ける「と」を伴う例も「と」までをまとまりととらえ、その用例数は表に（）

〈表4〉 まとまりの拍数ごとの用例数

		まとまりの拍数								
		時代・世話	4	5	6	7	8	9	10以上	
形容詞の拍数 〔シ〕型	2	1(1)	時代1(1)			1/ 会1(1)				
	3	93 (13)	時代81(11)		35/ 会24(1) 地11	4/ 会4(2)	36/ 会11(4) 地23 道2	6/ 会5(4) 地1		
			世話12(2)		4/ 会4	2/ 会2(2)	6/ 会1 地2 道3			
	4	171 (53)	時代145(49)	12/ 会9 地3	49/ 会39(38) 地4 道6	15/ 会10 地5	38/ 会25(9) 地 10 道3	29/ 会24 地 5		2/ 会2(2)
			世話26(4)	1/ 道1	9/ 会4(3) 道5	1/ 会1	12/ 会5(1) 地3 道4	2/ 会2	1/ 地1	
	5	238 (41)	時代214(38)		138/ 会86 地48 道4	30/ 会30 (30)	35/ 会31 地2 道2	9/ 会9(8)		2/ 会2
			世話24(3)		17/ 会7 地9 道 1	3/ 会3(3)	4/ 会3 地1			
6	27(3)	時代27(3)			23/ 会23	3/ 会3(3)	1/ 会1			
7	3	時代3				3/ 会2 道1				
小計	533 (111)		13/ 会9 地3 道1	252/ 会164 (42) 地72 道16	79/ 会74 (38) 地5	137/ 会81(17) 地41 道15	47/ 会41 (12) 地6	1/ 地11	4/ 会4(2)	
形容詞の拍数 〔ヘー〕型 〔シ〕型	2	8(2)	時代5(1)		1/ 会1	1/ 会1	1/ 会1	2/ 会2(1)		
			世話3(1)		1/ 会1		2/ 会2(1)			
	3	97(28)	時代51(14)	12/ 会12	17/ 会16(12) 地1	9/ 会9	5/ 会5	6/ 会6(1)	1/ 会1 (1)	1/ 会1
			世話46(14)	13/ 会13	17/ 会17(14)	1/ 会1	6/ 会5 道1	6/ 会6		3/ 会3
	4	279(15)	時代153(6)		94/ 会94	6/ 会6(3)	48/ 会48	4/ 会4(2)		1/ 会1(1)
			世話126(9)		87/ 会87	9/ 会9(7)	26/ 会26	2/ 会2(2)		2/ 会2
	5	58(7)	時代37(4)			19/ 会19	5/ 会5(4)	13/ 会13		
			世話21(3)			13/ 会13	3/ 会3(3)	4/ 会4	1/ 会1	
	6	9(1)	時代8(1)				3/ 会3		4/ 会4	1/ 会1(1)
			世話1				1/ 会1			
7	2	時代1					1/ 会1			
		世話1						1/ 会1		
小計	453(53)		25/ 会25	217/ 会216(26) 地1	58/ 会58 (10)	100/ 会99(8) 道1	39/ 会39(6)	6/ 会6 (1)	8/ 会8(2)	
形容詞の拍数 〔シ〕型 〔ヘー〕型	2	5	時代4		1/ 会1	1/ 会1	2/ 会1 地1			
			世話1				1/ 会1			
	3	45(4)	時代43(4)		4/ 会4(2)	7/ 会7	4/ 会4(1)	27/ 会20 地 7	1/ 会1 (1)	
			世話2				1/ 会1	1/ 会1		
	4	293(13)	時代272 (13)		218/ 会143 地75	12/ 会11(11) 地1	28/ 会24 地4	2/ 会2(1)		12/ 会12(1)
			世話21		21/ 会11/ 地10					
	5	5(2)	時代5(2)				1/ 会1(1)	3/ 会3	1/ 会1 (1)	
	6	3	世話3				3/ 会2 道1			
小計	351(19)			244/ 会159(2) 地85	20/ 会19(11) 地1	40/ 会34(2) 地 5 道1	33/ 会26(1) 地7	2/ 会2 (2)	12/ 会12(1)	
全計	1337 (183)		38/ 会34 地3 道1	713/ 会539(70) 地158 道16	157/ 会151(59) 地6	277/ 会214(27) 地46 道17	119/ 会106 (19) 地13	9/ 会8 (3) 地1	24/ 会24(5)	

に入れて示し、後で考察することにする。

これらを踏まえ、用例の多い三拍語、四拍語、五拍語のシク活用形容詞を中心に各形式の特徴を次に観察する。

五・二 「シ」型の特徴

「シ」型に見られる顕著な特徴は先も述べたように五拍語が多いことであり、異なり語数の五二%、延べ語数の四五%を五拍語だけで占めている。「シ」型に目立つ「おびただし」「氣づかはし」「ことをかし」「ものものし」などはすべて五拍語で、五拍語はそのまま五拍のまとまりとしやすいため「シ」型となることが多いと考えられ、「シ」型に異なり語数が多いのも全体的に使用頻度の低い五拍語が「シ」型に集中していることによる。

- ④ たゞあい／＼と礼をして頭さげるに隙もなく。割り膝痛くともすれば。をなごゐるまゝしどけなく行儀つくるもいた／＼し。 「雪女五枚羽子板」地 五卷三〇〇頁
- ⑤ 留守の内に方々の。催促使妙閑の耳に入ていか様の。首尾になつたも氣づかはし誰ぞ出よかし内証を。とくと聞て入たしと 「冥途の飛脚」忠兵衛心話 七卷二八五頁

このようにそのまま五拍、あるいは感動詞を伴って七拍となる例が多くを占め、前後の文脈から見ても五拍あるいは七拍でおさまりは良く、他の拍数の語に比べ、五拍語には感動詞以外の語とまとまりとなる例はほとんど見られない。また六拍八拍のまとまりとなるものは一例を除いて会話文を受ける「と」を伴うものであり、その例外の一例も「ハア、ことをかし」と感動詞を三拍としたために八拍と数えたもので、多くは五拍七拍で終止した会話文の例がそれを受ける「と」によって一拍ずれたということになる。

三拍語は、四拍語の形容詞や他の語とまとまりとなって五拍七拍となるものが多く、六拍八拍となるのは五拍語と同様会話文を受ける「と」と伴ったものがほとんどである。⑥ 紙表具のていなり共。朽ちてくちせぬ金砂子。極彩色に劣らじといさみす、みし勢ひは。ゆ、し頼もし我ながら。あつはれ絵筆のけなげさよ。

- 「けいせい反魂香」地 五卷三七九頁
- ⑦ 櫛笥見れ共刃物はなし。エ、何とせん。是よ／＼二面の鏡思ひ付たりあら嬉し。鏡は女の魂武士の太刀かたな。本望とげん銘の物。得たりや嬉しと走寄れは

一方四拍語では「シ」で終止する形容詞が「と」を伴うことよつて五拍となる例が多い。四拍語で「と」を伴わず五拍のまとまりとなつてゐるのは「おいたはし」「おめづらし」と接頭辞「お」のついた例で、ここでも五拍七拍のまとまりとなる例が目立ち、まとまりで八拍以上となるのは繰り返しのものが多い。つまり五拍語はそのまま五拍のまとまりとなる例が多く、四拍語は「と」を伴うことで五拍のまとまりとなる例が多いという傾向が見て取れる。

しかし、他の語とまとまりとなりにくい、四拍のままの例が二三ある。^(注5)地の文では四拍のまま終止する例が三例見られ、いずれも謡曲などを背景とした音曲的な色彩の強い場面で、⑧は景事部分の二人語りの例で七五調とは異なつており、節回しによつて工夫されてゐると思われる。地の文で四拍のまとまりの例があるのは「シ」型のみである。⑧問夫をさるる、乗り換への。女郎の恨の夜々を重て付廻したる。恐ろし。猶妄執の煮返る熱い爛より飲むなら酒の。冷やつひやひい。

「津国女夫池」地（千畳敷其世かたり）一二卷一〇八頁

次は会話文の例である。

⑨垣の外にて松風は夫の盃事女に呑することの。口惜やねたまし手だに届かば打こぼさん。取て呑んと息をはり

「松風村雨束帯鑑」松風心話 五卷七六頁

⑩吉備の武彦といふ仁義者に似合ぬ。人使ひ知らぬ女房と陰沙汰も恥かし。皆の者の辛勞より夫婦が心扱ひ。聞て恨をはれてくれ。

「日本武尊吾妻鑑」おほろ月↓舎人 一一卷六四五頁

⑪当国の殿様村上左衛門義清公各へ対面有べきとて。唯今是へと申し上れば勝頼。あしらひもむつかし兩人逢て挨拶あれ。我はどれへぞ外したしと。の給ふ間に

「信州川中島合戦」武田勝頼↓高坂弾正・直江時綱

一二卷二一三頁

右の例では、例えば⑨「口惜やねたましや」⑩「陰沙汰も恥かしい」⑪「あしらひもむつかし」など五拍のまとまりとすることも考えられるが「シ」型のままで四拍となつてゐる。

六拍語も「シ」型に目立つがそのまま六拍のまとまりである例が多く、すべて時代物の会話文でやや改まった物言

いとなっている。

⑫討ち手は藏人一人心得せよと云所に。菅丞相参内のよし披露する。対面してはことむつかし役々の官人。油断有など云すて、記録所に。かくれ入にけり。

「天神記」藤原時平↓官人 八卷一九九頁
「ことむつかし」「ことやかまし」「そらおそろし」など接頭辞がついた語が多く、仮に接頭辞のない「むつかし」「やかまし」であったとしても意味はそれほど変わらない。実際「シシ」型に「むつかし」「やかまし」の例は多い。六拍は四拍の字足らずよりも前後の文になじみ、またこの場合は語彙としてもものしい武士の会話にふさわしいという解釈もできる。語尾を「シシ」とはせず「シ」のまま六拍としている点には留意するべきだろう。「シ」型では五拍七拍にまとまる例が七三%あり、七五調の韻律の意識は感じられるが、単純に整えたわけではない。

五・三 「シイ」型の特徴

「シイ」型は形容詞の語尾が「シイ」となることによつて一拍増える。「シイ」型に用例の目立つものは四拍語の「う

らめし」「口惜し」「かしまし」「やかまし」などで、話者が感情や感覚を直接的に表現する例が多い。ほぼ会話文ということもあり、他の型式に比べ七五調というよりも口語性の強い場面に多く、韻律の意識は希薄にみえる。しかしそれも拍数ごとに見ていくと違いがあり、三拍語は最も韻律の意識は希薄で「まとまり」が掴みにくく、七五調に捉われていないといえる。七五調を基調としている場合には字余り字足らずはそのリズムを崩すこととなるが、特に四拍の「字足らず」はその感が強い。先に見た通り「シ」型では四拍語がそのまま四拍のまとまりとなる例があったが、「シイ」型でも三拍語の語尾が「シイ」となつて四拍のまとまりとなる例が合計二五見られる。部分的に七五調に近い例もあるが、全体としては七五調とはいえない例が多い。

⑬こなたの娘がかはひ程。おれもおれをかはひがる親仁がいとしい。銀払ふて男たてねばならぬ。あきらめて死んで下され。「女殺油地獄」与兵衛↓お吉 一二卷一八七頁
一方三拍語が「と」を伴つて五拍となる例は二六あり、五拍のまとまり三四例のうち多くを占める。こちらの方は

七五調に近い例が多い。

⑭どふぞお耳へ入れずにすむ様に頼み上ます。あのまつ
すぐな旦那殿お心のさげしみが。首切らるゝより悲しい
と。隠居の膝をいたゞきく／＼畳に。食ひ付泣きゐたり。

「今宮の心中」二郎兵衛↓貞法 七卷二五五頁
それに対し最も用例数の多い四拍語（六二％）では、
二七九例のうち二五五例で語尾が「シイ」となることでそ
のまま五拍あるいは七拍のまとまりとなっており、それ以
外の拍数で後に「と」を伴う例は一五例のみである。

⑮お情ない旦那殿。何とて左様によこしまにおきゝなさ
るゝぞ。新七が御一分を捨てたとはうらめしい。すてま
いための御意見金のことは申さぬ。

「淀鯉出世滝徳」新七↓勝二郎 五卷五三四頁
つまり三拍語は「と」を伴うことで、四拍語は「と」を伴
わないことでそれぞれ五拍におさまるという傾向が見え
る。これは「シ」型において四拍語は「と」を伴う例が多
く、五拍語は五拍のままの例が多かったこととも通じる。
語尾が「シイ」で五拍になる四拍語は、五拍七拍にまとま
りやすいということがいえる。

五拍語は語尾が「シイ」のまま六拍のまとまりとなる例
が多く、八拍のまとまりは感動詞を伴う例である。いずれ
も口語的な文脈の中で現れやすい。

⑯ア、家老殿が。ア、慮外ながら。エ、何ぞよい分別有
かと思へばあほうらしい。鼻の先智恵な返事言はせ跡へ
も先へもいくことか。使者にむかひつがひし詞は取かへ
されず。

「井筒業平河内通」紅梅↓有常北の方 一巻四一五頁
「シイ」型も口語的な文脈が多いとはいえその出現と拍
数には関連があり、五拍七拍にまとまる例は七〇％ある。
語彙の拍数により違いはあるが、全体の出現の割合では
「シ」型と大きく変わらない。

五・四「シシ」型の特徴

「シシ」型は五拍七拍の割合が八一％を占め、最も韻律
の意識が強い。「シシ」型に顕著な特徴は異なり語数、延
べ語数ともに四拍語に用例が集中していることであり、異
なり語数のうち七一％、延べ語数では八三％が四拍語であ
る。四拍語は語尾が「シシ」となることによって五拍とな

るが、「シシ」型の例は五拍のまとまりにやはり集中している。

三拍語は繰り返しや他の形容詞と羅列される形のまとまりとなつて出現することが多く、五拍や七拍よりも八拍のまとまりとなるものが目立つ。同じく語尾によつて一拍増える「シイ」型では「と」を伴うことで五拍のまとまりになる傾向がみられたが、「シシ」型では会話の末尾にあつて「と」を伴う例は少ない。

⑰ (梶原が脅されながら退出する) 若兎共に手をひかれはふく／＼宿所に帰りけるおかし、。気味よし心地よし。いさぎよかりし振廻やと人々。どよめき立給ふ

「大磯虎稚物語」地 二卷四一〇頁

三拍語は「うれし」が用例の大半を占め、六拍のまとまりとなるのはすべて「うれし」の例で、感動詞を伴つて「ア、うれしし」などとなるので六拍としたものである。⑰や次の例のように、どの拍数の語でもまとまりで八拍以上になるものは同じ語の繰り返しや他の語との並列の例が多く、字余りにはなるが繰り返しのリズムが感じられる。

⑱ ヲ、頼もし、金王丸。心底はあらはれたりうれし、く。

疑ひし悔しさよ。ゆるしてくれよと言ひければ。

「烏帽子折」盛長↓金王丸 二卷一六頁

「シシ」型は延べ語数に対して異なり語数の比が低いが、⑰⑱のように特に時代物の地の文や武士の会話などで決まった形容詞の定型的な表現が多いことにもよると見られ、出現語彙でも「シシ」型に特徴的な「たのもし」「うれし」「いたはし」「すさまじ」等に対して「かなし」が見られないのも、「シシ」型が使用される話者や場面によるところが大きいと思われる。

四拍語は、繰り返しですがそもそも「シシ」型では圧倒的に多く、ほとんどがそのままシシ語尾をとることによつて五拍、感動詞などを伴えば七拍のまとまりとなる。四拍語で六拍のまとまりとなっているのはすべて「と」を伴うもので、その他は繰り返しが多いことから、「シシ」型は最も七五調への親和性が高く、韻律の意識が強く感じられる。

⑲ ア、音高し。よしなき山伏の噂して関守殿へ漏れ聞へ。とがめられては恐ろしし言はじや聞かじとさ、やきける。

「療静胎内拮」草刈童↓仲間 八卷一三二頁

⑳ 伺公の軍兵葉武者迄俄にたしなむ男ぶり。鎧の袖や草摺

にさはればがたひしがた〜と。衣紋つくるもさはがし
し。」「聖徳太子絵伝記」地 一〇卷二五九頁
五拍語はシシ語尾をとることによって六拍となり、七拍
のまとまりともなりにくく五例のみである。

②かゝる重悪の女人法ツ花の力いかなれば。竜畜蛇身の女
人の身の。南方無垢世界に成道を遂くるとは。是うたが
はし、と難す

「大覚大僧正御伝記」兎島↓大覚 二卷一一六頁
「シ」型に五拍語が多いことが顕著であったことから、
五拍語の場合には語尾を「シシ」とするよりも「シ」で止
めるといふという選択がなされたといふことも考えられる。

一方の六拍語は語尾を「シシ」とすることで七拍にでき
るが三例のみで、実際には先に見たように語尾が「シ」の
ままの例が多い。「シシ」型は五拍にまとまる傾向が著しく、
「シ」型、「シイ」型では七拍のまとまりが五拍の半分程度
あるのに対し、「シシ」型の七拍のまとまりは五拍の六分
の程度であり、五拍への志向が明らかである。六拍のま
とまりは四拍よりは避けようとする意識が低く、わざわざ
語尾を「シシ」とすることによって七拍とはしなかったと

もいえるかもしれない。

特に「シシ」型の五拍への志向をうかがわせる例がある。
今回調査対象としたのはシク活用形容詞だが、一例、ク活
用形容詞で語尾が「シシ」となるものがあつた。

②謙信呉子が秘術をつくせば信玄孫子が心を練り。両翼牛
角の大將〜自身のはたらき生死の境。めざましくも又
あやうしし。」「信州川中島合戦」地 一二卷三四頁

時代物の地の文においてこのような「形容詞／形容動詞
連用形」もまた「形容詞／形容動詞終止形」の形は定型
的な表現であるが、今回採取したシク活用形容詞を含む用
例一七例（一六例が時代物、一例が世話物の地の文）では
「また」の後はすべて五拍で、四拍語はシシ語尾をとつて
いる。「めざましくも又あやうし」では字足らずとなり、
それを避けるために語尾を「シシ」としたことがうかがえ
る。このように四拍語の場合は特に語りの調子のために語
尾を「シシ」としたという面も否定はできない。「シシ」
型では、「シ」型、「シイ」型に見られたような四拍のま
まりとなる例がないことも注目すべきである。

その一方、より七五調の調子の強い道行では一例を除い

て五拍か七拍のまとまりとなっているが、「シ」型の例がほとんどを占めており、どの拍数の形容詞でも他の語や「と」も含めて五拍七拍の音数を守っている。その道行に「シ」型が一例ある。

②③袖振る山の。うら山し。ゆき、の岡の松並て人目も。しげる葉もしげるおもはづ。かししはしとて。笠かたぶけてまつすくな石に助くる道疲れ。

「聖徳太子絵伝記」道行 一〇卷二九三頁
この場合は「し」の音の繰り返し返しの効果があるが、道行における七五調を保つために語尾を「シシ」としたとも考えられる。しかし情緒的な語りを聞かせる道行ではほとんど「シ」型が選ばれていることに、語りの調子を整えるというだけでない「シ」型と「シシ」型の違いを見ることが出来る。文体的な表現の差という面からも、今回対象としなかった「形容詞語幹+や」等其他の終止表現も含めて考察する必要があるだろう。

以上形容詞終止形の形式と拍数から考察したが、五拍七拍にまとまる割合は全体で七四%で、すべての形式におい

て五拍七拍への志向が認められる。また〈表4〉からわかるように五拍七拍では地の文の比率が高く、他の拍数のまとまりでは地の文は少ない。その点でも拍数と文体の関連が確認できる。中でも「シシ」型は五拍にまとまる傾向が強く、特に時代物では語りの調子に合わせるため語尾を「シ」とした可能性も否定できず、拍数によって「シ」型との使い分けがあったとの推測も可能である。「シイ」型でも、口語的な例が多いといえやはり韻律の意識は現れている。但し拍数を合わせるためだけであれば、語尾を「シ」か「シイ」「シシ」で調節することによってさらに七五調におさめることは可能であったが必ずしもそうでなく、七五調を意識しながらもそれに縛られてはいなかったといえるだろう。

六 形容詞終止形の出現位置による違い

六・一 終止形の位置が会話末尾の場合と会話途中の場合

各形式の傾向を見たが、その中で会話文末尾のシク活用形容詞終止形を地の文の「と」で受ける例があった。それについても改めて拍数の上から検討する。「と」で受ける

かどうかは、形容詞が一人のひと続きの会話の末尾にくるか、一人の会話の途中にあるかの出現位置の違いということになる。そこで会話文末尾の形容詞終止形を地の文の「と」が受ける例を「会話末尾」の例、会話文内に終止形がありその後にも同じ話者の発話が続く例を「会話途中」の例として特徴を見てみたい。「会話途中」の例は、終止形によって文が終止するか中止法であるかは峻別できず問わない。会話文末尾の形容詞を「と」で受けずすぐに別の話者の発話が続く例は「シ」型「シイ」型で一例ずつ、会話の後に「と」がなく地の文が続く例は「シ」型で二例あったが、このように会話文の末尾に形容詞があっても「と」で受けない例はここでは除く。

会話文に現れるシク活用形容詞終止形は全部で一〇七六例で、「シ」型三七三、「シイ」型四五一、「シシ」型二五二と「シイ」型が最も多いが、そのうち会話末尾の一八二例では「シ」型一一一、「シイ」型五二、「シシ」型一九で六割以上が「シ」型である。また「シ」型の中では四拍語が五三例、五拍語が四一例と、「シ」型には五拍語が多いにもかかわらず「と」が四拍語の形容詞を受ける例

が上回っている。一方四拍語の多さが顕著である「シシ」型は四拍語に「と」を伴う例が一三しかない。四拍語の場合「と」を含めて五拍のまとまりとしやすいので語尾を「シ」のままとした、ということも考えられる。さらに三拍語では、五拍のまとまりとなる一四例のうち「シイ」型で「と」を伴う例が一ある。以上から四拍語が末尾にくる場合は「シ」型、三拍語が末尾にくる場合は「シイ」型が選ばれやすく、「シシ」型が会話末尾にくることは少ないという傾向が見て取れる。

会話途中の例は八八九例で、「シ」型二六〇、「シイ」型三九六、「シシ」型二三三である。この「シ」型の例の内訳は四拍語六七例、五拍語二二九例と、会話末尾の場合の内訳は四拍語五拍語とは差がある。「シ」型は会話途中の比率は低くなり、語尾によって一拍多くなる「シイ」型と「シシ」型は会話途中の比率が高いが、「シシ」型は特に末尾の例が少なく会話途中に現れることが多い。

会話末尾の例と会話途中の例をまとまりの拍数からみると、会話末尾の例一八二例のうち五拍のまとまりは六九例（「シ」型四二、「シイ」型二五、「シシ」型二）、七拍は

二七例〔シ〕型一七、「シイ」型八、「シシ」型二)で、五拍七拍は全体の約半数にとどまり、「と」を伴うことによつて七五調の音数からはやや外れるものが増える。一方の会話途中の例では八八九例のうち五拍のまともりは四六七例〔シ〕型一二一、「シイ」型一八九、「シシ」型一五七)、七拍は一八六例〔シ〕型六四、「シイ」型九〇、「シシ」型三二)と、五拍七拍が七三%で詞章全体の割合に近い。

六・二 形容詞終止形で理由を表す場合

「シシ」型が会話の末尾よりも会話の途中に出現する例が特に多いことなどは、形式の表現性に違いがあることも考えられる。シシ語尾で原因・理由表現になることは先の湯澤(一九五五)、鈴木(一九九九)、京(二〇一五)で示唆されているところであり、古形が中止法、不十分終止に残るといふことも矢島(一九九二)、京(二〇一五)、また出雲(一九八五)にも示される。

そこで会話途中の例から、形容詞終止形が次に続く文の「理由」を表しているものに注目した。シク活用形容詞終

止形が原因・理由を表現していると思われる例は一七七例で、「前の文」こういう状態だから／こう思うから」「後の文」こうしなさい／こうしよう」と、次にとろうとする行動や促しの理由となつていているものがほとんどである。すべての形式において形容詞は負の状態や感情を表すものが大部分で、それが次の行動の理由を示すことになつてい

「シ」型の例では五拍語「けがらはし」「気づかはし」、六拍語「ことむつかし」「ことやかまし」が多く現れている。理由表現としては繋がりが緩やかなものも含まれるが、用例⑤⑩⑪⑫もこれにあたる。

⑭此女性を同船の事とがめられてはことむつかし。俊寛が養子娘なれば汝が主人急度預る。これより陸路を同道して都へのほれ。

「平家女護鳥」基康↓有王丸 一一卷二〇二頁
「シイ」型は「いとし」「むつかし」「やかまし」が多く、「やかまし」は理由表現以外では「うるさい」という意味が多いが理由表現では「面倒だ」「煩わしい」という意である。⑬もやや緩やかではあるが理由を表している。

⑮おまんは中にうる／＼と情なやうとましや。あの、もの、

がやかましいいちよつと戻つてさなりつと。らちあけてきませふか。「薩摩歌」おまん↓源五兵衛 六卷七二〇頁「シシ」型の「むつかし」「やかまし」は「シイ」型と共通するが、「シシ」型では「やかまし」はほとんどが「面倒だ」の意で理由表現に現れる。他に多いのは四拍語「いたはし」「おそろし」「口惜し」「はづかし」で、⑲も理由表現である。

⑳さん候此ごとく男子誕生候へ共。余り見る目もいたはしし責て七八歳迄御そだて候はゞ。広太の御慈悲と顔をも上ず泣ゐたり。「穠静胎内拵」二郎↓梶原 八卷一二五頁理由表現とみられるものは「シ」型六九例、「シイ」型四〇例、「シシ」型三八例で、「シイ」型にも理由を表す表現は見られるものの、会話途中に現れる三九六例中であることを考えると、「シ」型、「シシ」型よりかなり低い数値である。割合からいえば「シシ」型はやや多く、「シシ」型が会話末尾よりも会話途中に現れるのも、このような表現に用いられることが多いのが要因の一つであろう。

これも拍数に注目すると理由表現では一七七例中一三三例が五拍、一一例が七拍におさまるもので八割以上を五拍

七拍が占める。終止形で一旦止めて次の文へつないでいくという流れから、五拍というリズムがより意識されたのではないかと考える。またそれ以外の拍数三三例中二六例が「シ」型で特に六拍語に集中しており、先に六拍語は語尾が「シ」のままが多いと指摘したがその多くがこの理由表現にあてはまる。「ことむつかし」「ことやかまし」などは⑳のように「面倒なことになるからこうしよう」という場面理由を表すのに用いられやすい語彙であり、接頭辞を伴わない四拍語「むつかし」「やかまし」も「シシ」型で同様に理由を表す例が多いが、六拍語では語尾が「シシ」ではなく「シ」のままである。シシ語尾は先述のように七拍よりも五拍でおさまる例が目立ち、理由表現においてもシシ語尾にして七拍とすることには拘泥していなかったともいえる。

以上シク活用形容詞終止形で理由表現となる例では、用例の出方に違いはあり、「シシ」型の理由表現がやや多くまた因果関係が緊密であるように思われるものの、その用法に特別な差は見出し難い。「シイ」型が少ないことから古形が残りやすいといえるが、特に一七七例中四拍語の

形容詞は一〇六例あり、「いたはし」「おそろし」「口惜し」「はづかし」「むつかし」「やかまし」等は⑩⑪⑮⑲のうちに負の感情や状態を表明することによって次にとる行動の理由を示す場面に現れやすく、結果としてシシ語尾を取る例が多かったとも指摘できる。今後さらに文法的な面からも詳細な分析が必要である。

七 おわりに

拍数の面から近松浄瑠璃に現れるシク活用形用詞の終止形について見てきた。形容詞の拍数と終止形の形式には相関があり、いずれの形式でも五拍七拍へのまとまりの意識が認められる。各形式の特徴として次のようなことがあげられる。

- ① 「シ」型は五拍語の例が豊富である。また会話末尾の形容詞を「と」が受ける場合に選ばれることが多い。
- ② 「シイ」型はほぼ会話文に現れ、より自由な表現が多いがやはり五拍七拍のまとまりが認められる。
- ③ 「シシ」型は特に五拍のまとまりの例に集中している。会話文では末尾ではなく会話途中での出現が多い。

今回近松以外の資料は調査していないが、同時代あるいは近松後の浄瑠璃作品との比較によって、浄瑠璃作品での韻律の意識がより明らかになるはずである。ここでは拍数に注目して考察したが、対象部分の拍数だけでなく、文体や表現法などからも形式は選択されている。さらに浄瑠璃の言語の分析をするのであれば、詞章のみでなく、語りそのものや、地、詞といった節付への考慮も必要となろう。

近松の「語る処の長短は節にあり」という言葉をどう言語研究で生かしていくかも課題である。

(注一) 「文句にてには多ければ、何となく賤しきもの也。然るに無功なる作者は文句をかならず和歌或は俳諧などのごとく心得て、五字七字等の字くばりを合さんとする故、おのづと無用のてには多くなる也。たとへば、年もゆかぬ娘をといふべきを、年はもゆかぬ娘をばといふごとくなる事、字わりにか、はるよりおこりて、自然と詞づらいやく聞ゆ。されば、大やうは文句の長短を揃て書べき事なれども、浄るりはもと音曲なれば、語る処の長短は節にあり。然るを作者より字くばりを

きつしりと詰過れば、かへつて口にか、らぬ事有物也。

この故に我作には此か、はりなき故、てにはおのづからすくなし。」(岩波書店『日本古典文学大系五〇 近松浄瑠璃集下』「附説 近松の言説」による)

(注2)

加賀掾本「団扇曾我」「千載集」「盛久」はそれぞれ義太夫本「百日曾我」「薩摩守忠度」「主馬判官盛久」と対応している。このうち「シシ」型とそれ以外で違いがあったものは「帯でかくすもしほらしや」(「団扇曾我」)と「帯でかくすもしほらし」。(「百日曾我」)、「帳面もむつかし」(「団扇曾我」)と「帳面もむつかし」。(「百日曾我」)、「ヲ、たのもしく」(「薩摩守忠度」)と「ヲ、頼もし、く」。(「千載集」)、「やあめづらしや」(「弥五郎」)。「薩摩守忠度」と「やあめづらし」(「弥五郎」)。「千載集」である。

(注3)

近松浄瑠璃で「あな」「あら」に続くシク活用形容詞は連体形、終止形どちらとも一概に判断し難く、用例数に含めておいた。「あな」四例、「あら」一六例、すべて時代物の例である。

(注4)

高遠(二〇一一)では、近松作品ではないが竹本住大夫の「と」の語りについての言及がある。ちなみに住

大夫は「近松物は字余り字足らずで語りにくい」ということを述べている(『文楽のこころを語る』等)。また、八代竹本綱大夫『でんでん虫』でも、近松物の字余り字足らずの部分や「と」の語りについての工夫(「とがくし」)が述べられている。

(注5)

「御身ながらへもり立て本懐をとげてたべ。加藤兵衛が只今にも来れば見ぐるし。ここ放せと」(「酒呑童子枕言葉」六卷五三頁)の例は本文のまま「シ」型としたが、別本には「見苦し」とある。

(注6)

例外は次の一例で「字足らず」と感じられるものである。影印でも「はづかし」と認められ、校異本でも別形の提示はない。『新古典文学大系 近松浄瑠璃集上』(岩波書店)ではこの部分の注に「恥づかし」の誤りか。」とある。

はや真夜中の月代の。空を力に。東堀。澄み行水に影うつる。我身のにごりはづかし。恥はしばしのうき世なり共。(『今宮の心中」七卷二六五頁)

(注7)

このうち一例は別本には「と」がある。またこのほかに、一例「シイ」型を「とて」で受けるものがある。

調査資料(用例の掲出には、表記を改めたところがある)

『近松全集』(岩波書店)一―一二卷(時代物)世継曾我 出世
景清 三世相 佐々木先陣 薩摩守忠度 千載集 主馬判官盛
久 盛久 今川了俊 津戸三郎 烏帽子折 大覚大僧正御伝記
天智天皇 せみ丸 大磯虎稚物語 吉野忠信 十二段 曾我七
以呂波 本朝用文章 最明寺殿百人以上臈 日本西王母 曾我五
人兄弟 団扇曾我 百日曾我 天鼓 用明天王職人鑑 本領曾
我 加増曾我 松風村雨束帯鑑 雪女五枚羽子板 けいせい反
魂香 傾城吉岡染 酒吞童子枕言葉 孕常盤 源氏れいぜいぶ
し 兼好法師物見車 碁盤太平記 吉野都女楠 鎌田兵衛名所
盃 源義経将基経 曾我扇八景 曾我虎が磨 百合若大臣野守
鏡 大戦冠 けいせい懸物揃 嫗山姥 燦静胎内裙 天神記
持統天皇歌軍法 相摸入道千疋犬 釈迦如来誕生会 娥歌かる
た 嵯峨天皇甘露雨 弘徽殿鸚羽産家 賀古教信七墓廻 梶狩
剣本地 国性爺合戦 国性爺後日合戦 聖徳太子絵伝記 日本
振袖始 曾我會稽山 傾城酒吞童子 本朝三國志 平家女護島
傾城島原蛙合戦 井筒業平河内通 双生隅田川 日本武尊吾妻
鑑 津国女夫池 信州川中島合戦 唐船嘶今国性爺 浦島年代
記 関八州繫馬

(世話物) 曾根崎心中 心中二枚絵草紙 卯月紅葉 堀川波鼓

卯月の潤色 五十年忌歌念仏 心中重井筒 丹波与作待夜のこ
むろぶし 心中刃は水の朔日 淀鯉出世滝徳 心中万年草 薩
摩歌 今宮の心中 冥途の飛脚 夕霧阿波鳴渡 長町女腹切
大経師昔暦 生玉心中 鍵の権三重帷子 山崎与次兵衛寿の門
松 博多小女郎波枕 心中天の網島 女殺油地獄 心中宵庚申

参考文献

出雲朝子(一九八五)「はさみこみ」について―文法史的考察
―『国語学』一四三
辛島美絵(二〇〇〇)「シシ語尾形容詞について―仮名文書の
例を中心に―」『国語国文』六九―六
北原保雄(一九七九)「形容詞の語音構造」『中田祝夫博士功績
記念国語学論集』
京健治(二〇一五)「シシ語尾形容詞と「不十分終止」」『岡大
国文論稿』四三
小松寿雄(一九七五)「近松世話浄瑠璃における武士の言葉―
文語性・古語性の検討―」『埼玉大学紀要』一一
坂口至(一九八二)「浄瑠璃詞章の一考察」『文献探究』一〇
佐藤喜代治(一九六二)『日本文法要説 古語編 上巻』(日本
書院)

鈴木丹士郎（一九六三）「形容詞「―シシ」について」『国語学
研究』三

鈴木丹士郎（一九九九）「近世における形容詞シシ語尾の展開」
『近代語研究』一〇

高遠弘美（二〇一一）「大夫の語りありてこそ―竹本住大夫師
に教えて頂いたこと―」『文学』一二―二

竹本住大夫（二〇〇三）『文楽のこころを語る』文藝春秋
竹本綱大夫（一九六四）『でんでん虫』布井書房

近石泰秋（一九六五）『操浄瑠璃の研究』続編 風間書房
矢島正浩（一九九二）「近世上方浄瑠璃における形容詞文―ナシ・
ナイの表現性をめぐって―」『国語国文学報』五〇

矢島正浩（二〇〇四）「言語資料としてみた近松世浄瑠璃の文体」
『江戸文学』三〇

湯澤幸吉郎（一九五五）『徳川時代言語の研究』風間書房